五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集

福泉遺跡

（試掘調査報告書）

（T・P1北壁下のⅠa層出土）

〔布目状圧痕のある楕円形砂鉄塊〕

1983．3

五所川原市教育委員会

福泉遺跡正誤表

頁	行	誤	正
6	(写　2)	T3西南隈の土器片	T3西南隅の土器片
8	(写　4)	トレンチと出王状況	トレンチと出土状況
25	20	長い間固っていない	長い間固まっていない

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書

第1集　1968　津軽・前田野目窯跡

第2集　1974　原子遺跡

第3集　1975　観音林遺跡 ①

第4集　1979　狐野遺跡 ①

第5集　1980　狐野遺跡 ②

◦第6集　1983　福泉遺跡

序　　文

五所川原市教育委員会
教育長　鈴　木　太左衛門

「福泉遺跡」は市内飯詰字福泉にあって、五所川原市中山山脈に沿うて点在する数多くの遺跡のなかの一つで貴重な文化遺産であります。

この遺跡は飯詰町内の大通りに面した林檎園中にあったが近く宅地開発するとの申告があって調査を開始したものであります。

昭和57年5月2日より5月3日まで2日間にわたって発掘を実施したところ、以下記載のとおり貴重な結果を得たものであります。

発掘にあたって、この場所の地主である中道吉野氏の格別なご好意と発掘作業に従事された新谷雄蔵氏はじめ沢山の方々に心から感謝申し上げます。

この記録が津軽先人の文化研究ならびに後世に役立てば誠に幸甚に思います。

例　　言

1．この報告書は、自昭和57年５月２日～至５月３日の２日間、五所川原市教育委員会が実施した「福泉遺跡」の試掘調査の記録である。

2．本報告書の執筆・編集は新谷雄蔵が担当した。また、地学に関する事項は川村真一が担当し、実測図の作成、セクション図のトレースは、菊池由紀子が担当した。また、土器の復原は、浅木全一が担当した。

3．本報告書中、必要なものには、縮尺、または、計測値を入れてある。

4．遺物は、土器、楕円形砂鉄塊、および剥片であるが、すべてに一連番号を付してある。

5．グリット、トレンチの実測とその図面の作成は、五所川原市建設課北川智章が担当した。

6．遺物は一括して五所川原市教育委員会が保管する。

目　　次

序　文……1

例　言……2

目　次……3

☆　調査要項……4

☆　写1～写4……5

〔Ⅰ〕はじめに　〔第1図，第2図〕……9

〔Ⅱ〕地形と層序　〔第3図，第4図〕……10

〔Ⅲ〕出土遺物……14

☆　縄文時代編年表〔表1〕……15

☆　出土土器，群別表〔表2〕……17

☆　出土土器，群別・型式別・器形別分類表〔表3〕……19

〔Ⅳ〕出土土器（群別，型式別土器について）……20

(1)　第1群土器……20

(2)　第2群土器……20

(3)　第3群土器……21

(4)　第4群土器……22

(5)　第5群土器……23

〔Ⅴ〕布目状圧痕のある楕円形砂鉄塊……25

〔Ⅵ〕出土剥片……26

〔Ⅶ〕考　察……27

〔Ⅷ〕おわりに……31

（参考文献）……31

〔P・L1～P・L11〕……32～43

☆調査要項

○発掘主体者　五所川原市教育委員会

代表　教育長　鈴　木　太左衛門

○主　　管　五所川原市教育委員会　社会教育課

課長　三　浦　新　一

副主幹　時　田　武　則

主査　中　村　　健

○発掘担当者　日本考古学協会々員

新　谷　雄　蔵

○調　査　員　日本地理教育学会々員

川　村　真　一

北奥古代文化研究会々員

桜　井　有　一

北奥文化研究会々員

成　田　不二雄
浅　木　全　一
小　山　英　治
太　田　文　雄
米　谷　武　次
河　島　泰　三
木　村　捷　則
菊　池　由紀子

☆発掘期間および発掘面積

○発掘面積　86.25㎡

○発掘期間　昭和57年5月2日．3日

○土地所有者　五所川原市大字飯詰字福泉221

中　道　吉　野

☆発掘協力員　・五所川原市立飯詰小学校6年生，および歴史クラブ員　計50人

・同上指導教諭　太　田　文　雄

教諭　中　道　烈　子

〔写１〕

１９８２．５．３日　記念撮影

（発掘参加者）

（飯詰小の生徒たち）

※わたしたちも
やがて考古学者に？

〔写２〕発掘スナップ―１．

※発掘区
遠景

（東方より写す）

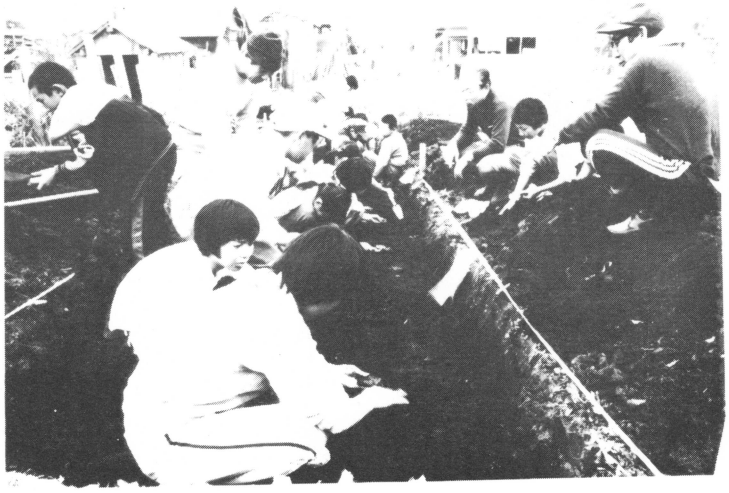
※
（地層断面図の
作成中）

※Ｔ３西南隈
の土器片．

〔写３〕発掘スナップ―２

※大人も！
―おや、なにか出たぞ!!―

※Ｔ３で飯詰小の生徒たち．一列にならんで―

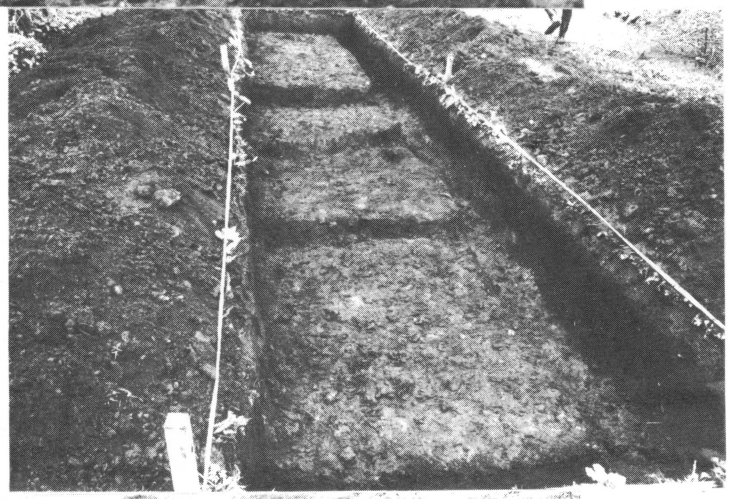


☆子どもも！
―出た、出た！―

〔写４〕トレンチと出王状況

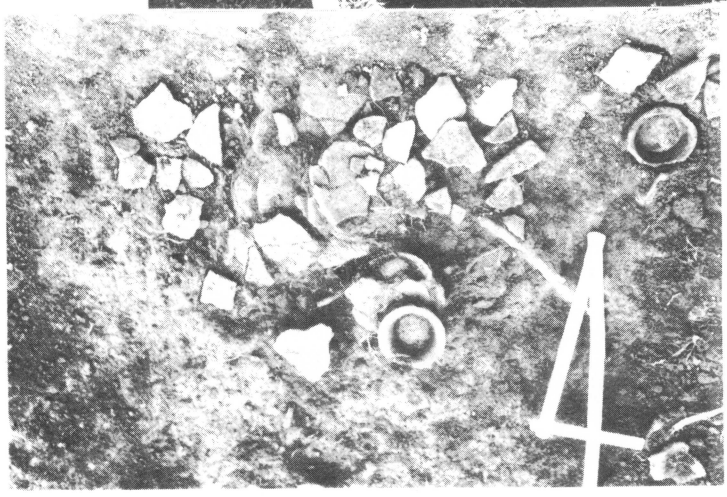
☆
Ｔ３(トレンチ３)の
状況

(西方より写す)



☆Ｔ２(トレンチ２)
の状況

(西方より写す)



※Ｔ３北壁近くの
土器片出土状況

(上方より)

〔Ⅰ〕 はじめに （第１・２図）

福泉遺跡は、五所川原市大字飯詰字福泉198番地に所在する縄文時代晩期の遺跡であって、全国遺跡地図（青森県版No.30）に記載されている周知の遺跡である。

本遺跡は、飯詰部落のほぼ中央に位置する台地上にあって、遺跡は発掘調査を実施する直前まではりんご畑であった。

このりんご畑の西側には、飯詰部落の中央を走る道路が南北に通じ、東側は崖となりその直下には、飯詰川が流れている地形である。

この遺跡のほぼ中央東側にレベル原点を設定したが、標高32mを計った。

遺跡の範囲は約0.5 haに及ぶものと思われるが、本格的調査に備えて、中心部をさけ、この遺跡の東側、南側の側辺に、第２図に示すように、G_1,G_2,G_3 グリットを４×４mとして設定し、その北西に２m×８mのトレンチー（T_1）ーを組み、また、第２図に示すように、T_2,T_3をそれぞれ２m×10m，２m×８mとして設定した。

それぞれのグリット、およびトレンチの標高については、第２図－１～６に示したとおりである。

発掘は、G_1,G_3を先行させて実施したのであるが、G_1,G_3は、表土約５～10cmで、いきなり、Ⅱ層とした黄褐色礫質粘土層となり、包含層は存在しない。

また、つぎにT_1の発掘にかかったのであるが、T_1においても、表土約２～４cmでベースであるⅡ層とした黄褐色礫質粘土層となっており、ここにも包含層は検出されない。

つぎに、T_3,T_2を設定し発掘にかかる。T_2においては、その東側半分は、表土がやや厚く、西側へ発掘が進むにつれて、包含層が厚くなる傾向にある。

また、T_3においては、包含層である黒土層が、ますます厚くなっている。

すなわち、現在の表土そのものも包含層の一部であったものと観察された。

遺跡の所在する原地形は、東方が高く、西側へ向って緩傾斜をなしていたものを、東側の高所を削って平面に整地されたものと認められた。

その判断に立って発掘の中心をT_2,T_3にうつすことにした。またT_3北壁中央部において、壁面近くに遺物が集中していたので、第２図に示すとおり、T・P_1(1.5 m×1.5 m)の拡張区を設定し発掘を進めた。なおこの拡張区T・P_1からは、後述するP・L_1－１．２（実測図１．２）および、P・L10－98ａ，98ｂに示した、鉢形、壺形土器、布目状圧痕のある楕円形砂鉄塊が出土したことは興味深い。

わずか２日間の発掘であったが、本福泉遺跡の性格の一端にふれることができた。

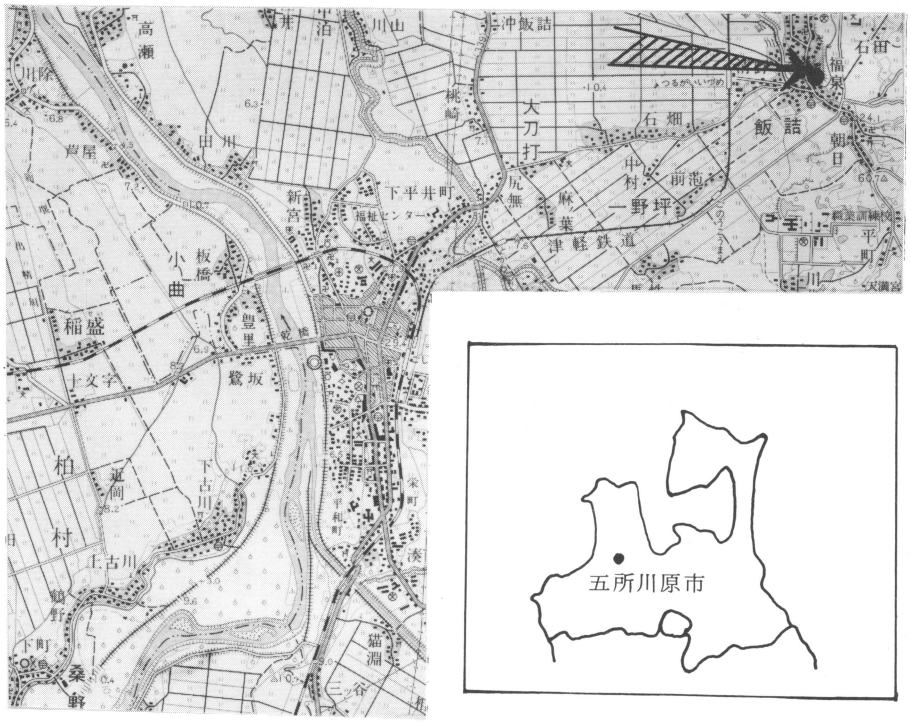
それではつぎに、遺跡周辺の地形と、地質、層序について簡単に述べることにする。

〔Ⅱ〕 地形と層序

(1) 遺跡周辺の地形 （第１図）

〔第１図〕遺跡付近地形図

$$S = \frac{1}{50000}$$



※発掘前の福泉遺跡全景

西方より写す）

(1) 遺跡周辺の地形

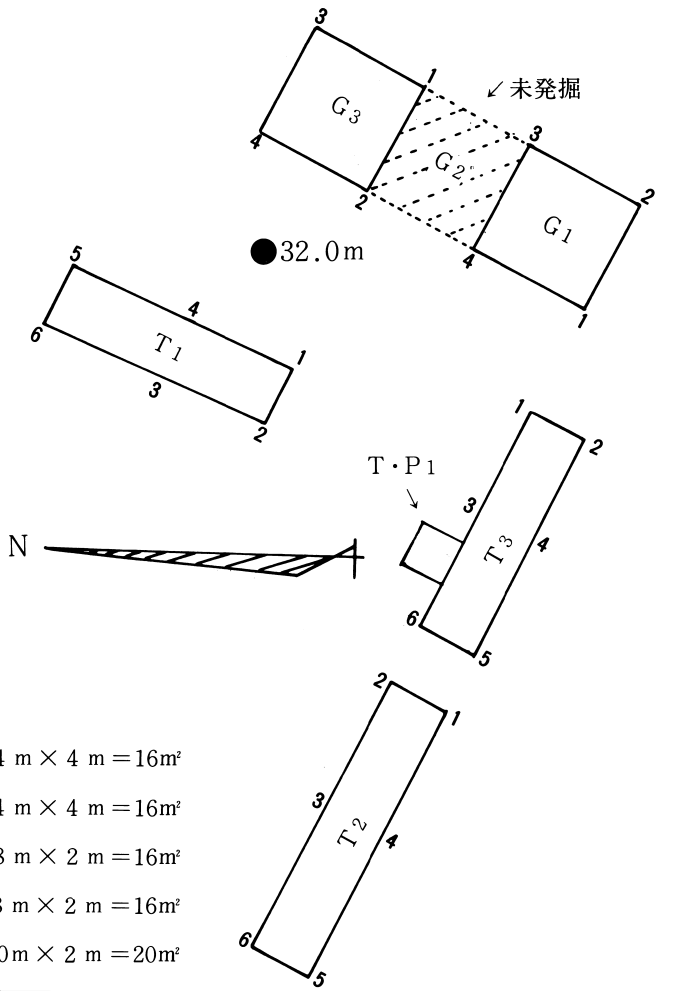
福泉遺跡のある飯詰は北部津軽平野の東縁、五所川原市の北東 1.5 kmのところにある。

北部津軽平野では四段の段丘が知られ、古い方（高い方）から新しい方へ第一段丘から第四段丘まで分ける。これら段丘のうち第二段丘がよく連続して発達している。

津軽平野東縁の第二段丘は面の高さが15～20mである。遺跡はこの段丘上に立地している。段丘面は西にやや傾斜し、遺跡のすぐ東側は比高約20mの段丘崖となっている。

遺跡周辺の河川には、中山山系から西へ流れる飯詰川があり、下岩崎付近で大渕川と合流して南下し、遺跡の南でほぼ直角に流路を変え西流して平野に出、十川と合流する。

〔第 2 図〕福泉遺跡発掘区配置図　$S = \frac{1}{20}$



G 1 ＝ 4 m × 4 m ＝16m²

G 3 ＝ 4 m × 4 m ＝16m²

T 1 ＝ 8 m × 2 m ＝16m²

T 2 ＝ 8 m × 2 m ＝16m²

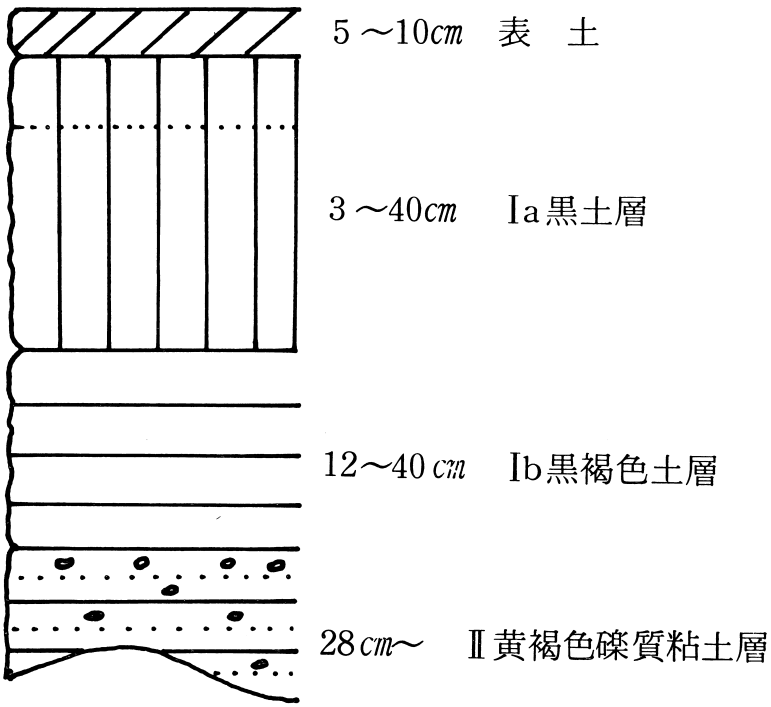
T 3 ＝10m × 2 m ＝20m²

＝84m²

（m）

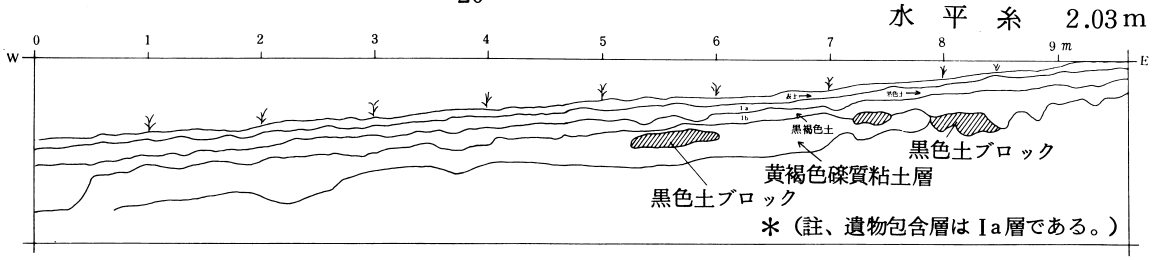
G 1 － 1	31.10
2	30.94
3	30.78
4	30.71
G 2 － 1	30.78
2	30.69
3	30.65
T 1 － 1	30.61
2	30.57
3	30.51
4	30.61
5	30.59
6	30.48
T 2 － 1	29.18
2	29.16
3	28.77
4	28.74
5	28.42
6	28.44
T 3 － 1	30.28
2	30.23
3	29.69
4	29.74
5	29.34
6	29.35
G 2 － 4	30.69

〔第３図〕基本層序図



〔第４図〕T3北壁セクション図　$S=\frac{1}{20}$

レベル原点　32.0 m
眼高レベル　2.24 m
水　平　糸　2.03 m



実測者　川村・菊池

(2) 遺跡の地質および層序

遺跡をのせる段丘の基盤は、石英粒の多い粗粒砂岩、浮石質凝灰岩からなる鮮新世の立山層で、その上に厚さ60～70cmの段丘礫層がのっている。これらは厚さ60～70cmの赤褐色の火山灰層によって被覆されている。遺跡付近ではこの火山灰層はほどんどなく、二次的堆積層としてみられるにすぎない。

遺跡の層序は次のとおりである。層序の模式図は第３図に示すとおりである。

Ⅰａ層：　黒色土層　遺物の主要包含層である。上層４～16cmは移動層で灰黒色を呈し中に径２～３cmの頁岩の礫を含む。

Ⅰｂ層：　黒褐色土層　褐色のローム層であるが、頁岩の長円礫を含み、黒色を呈することからロームの二次的堆積層と思われる。

Ⅱ層：　黄褐色礫質粘土層　遺跡の基盤層で細角礫まじりの粘土層である。

〔Ⅲ〕　出土遺物（実測図1・2，P・L1～P・L11）

出土遺物は、りんご用ダンボール箱で約3箱分の出土である。そのうちわけは、縄文式土器・楕円形砂鉄塊・剥片に分けられる。

これらの遺物は、T3トレンチの西半分、およびT2トレンチの東半分の地点で多く出土した。

特に集中的に出土した地点は、T3トレンチの中央部北壁付近（そのためT・P1の拡張区を設定した。）と、同トレンチの西端近くである。

また、T2トレンチでは、このトレンチの東半分において全般的に出土した。

それでは、土器、楕円形砂鉄塊、剥片に分けて以下に述べることにする。

☆　土器　（P・L1～P・L9，実測図1・2）

出土した土器は、既述したようにりんご用ダンボール箱で約3箱分であるが、これらの出土土器は、3片を除くと、すべて縄文時代晩期の土器群である。

つぎに示した〔表1〕は、縄文時代晩期の編年表であるが、当五所川原市内に所在する前期・中期・後期・晩期にわたる遺跡および有名遺跡も、合わせて示しておくことにする。

縄文時代編年表　〔表1〕

推定年代	期	土器型式	福泉遺跡出土土器	五所川原市および付近の有名遺跡名
6000 ↓ 5000	前期	a・b・c・d1・d2 式		○ 原子A遺跡 石神遺跡
↓ 4000	中期	円筒土器系 a・b・c・d1・d2・e 式 大木系 7a・7b・8a・(8b)・9・10	第1群土器	○ 鎧石遺跡 一本松遺跡
↓ 3000	後期	十腰内 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ		○ 原子B遺跡 妻の神遺跡
↓ 2000	晩期	大洞 B (B・C) (C1) (C2) A A'	← 第2群土器 ← 第3群土器 ← 第4群土器 ○第5群土器	○ 観音林遺跡 ○ 福泉遺跡 亀ケ岡遺跡 五月女萢遺跡 是川遺跡 砂沢遺跡
↓	弥生時代	田舎館Ⅱ式 （○印は、福泉遺跡出土）		○ 山道溜池遺跡 垂柳遺跡 （○印は、五所川原市内）

この〔表1〕に示したように、本遺跡より今回の試掘調査において出土した土器群は、第1群～第5群土器に分けられる。

これらの土器群を、土器型式別に分類すると、縄文時代中期末に位置づけられる「大木8b式」比定土器（P. L4－30・31・32）、および、縄文時代晩期の「大洞BC・C1・C2式」の各型式の土器が出土した。

また、第5群土器としたものは、粗製土器群であって、「大洞B・C,C1,C2式」土器（精製土器）に伴う土器群である。

（註）ここで述べる「精製土器」または「粗製土器」とは、つぎの条件を満たすものである。

「精製土器」の概念

① 土器の表面に、その所属する型式の主文様が施文されているもの。

② 無文のものでも研磨されているもの。

③ 朱ぬりされているもの。

④ ①，②，③のうち幾つかの条件をあわせてもつもの。

「粗製土器」の概念

① 口縁より胴部、底部まで、縄文・撚糸文・条痕文の施文されるもの。

② 口頸部に、その所属する型式の主文様が施文されるが、肩部より底部まで縄文・撚糸文・条痕文の施文されるもの。

③ 無文のもので、胎土・成形、整形の悪いもの。

④ 煮沸痕のあるもので、①～③の幾つかの条件を満たすもの。

以上の概念で、精製・粗製土器を分類している。

すなわち、さきに述べた第5群土器としたものは、粗製土器の①に該当するものであり、また、②に該当するものは、口頸部にその所属する型式の主文様が施文されているので、その所属する型式（該当する群）に入れてある。〔表1〕編年表は、そのように理解して見ていただきたい。

なお、第5群土器については後述する。また、つぎに示す〔表2〕は、出土した土器約3箱（りんご用ダンボール箱）から、代表的なもので、遺跡の全容が理解されるものをサンプリングして掲げた97点の土器を、群別、型式別、精製、粗製土器別に分け、土器番号で示したものである。（P・L1～P・L9）

〔表1〕編年表、〔表2〕群別表で理解されるように、今回の試掘において、縄文時代中期の土器型式で1型式（大木8b式比定）、および、同晩期の土器型式で3型式（大洞B•C，C_1，C_2式）の土器が出土した。

また、精製土器、粗製土器が出土したのであるが、その比率は精製土器27.83％、粗製土器72.16％となっている。

しかし、これはサンプル数の比率であって正確には、精製土器は10％程度のものと思われる。

福泉遺跡出土，土器群別表　〔表2〕

群別（型式別）	精製 粗製	P・L, No	土器番号
第1群土器 （大木8b式比定）	粗製	4	30・31・32
第2群土器 （大洞B・C式）	精製	1	実測図1－1・2
	粗製	2	1・2・3・4・5・6
第3群土器 （大洞C1式）	精製	3	16・17・18・19・20・21・22・23 24・25・27・28・29
		4	33・34・35・36・37・38・39・40・41
	粗製	7	63
		2	7・8・9・10・11・12・13・14・15
		3	26
		5	42・43・44・45・46・47・48・49・50
		7	64
		9	94・95・96・97
第4群土器 （大洞C2式）	精製	6	51・52・53 65
	粗製	7	66・67・68
		9	89・90・91・92・93
第5群土器 （大洞B・C～C2式土器に伴出する）	粗製	6	54・55・56・57・58・59・60・61・62
		7	69・70・71・72・73・74
		8	75・76・77・78・79・80・81・82 83・84・85
		9	86・87・88

以上、群別、型式別、そして精製、粗製別についてふれてきたのであるが、つぎに器形別に分類し、土器組成について考えてみることにする。

（註．土器組成とは、ある時期にどのような器形がセットになっているかを知ることである。）

〔表３〕器形別分類表は、群別、型式別、器形別分類表である。この〔表３〕を見ると下記のようになる。

◎ 第 1 群 土 器 （大木８ｂ式比定）→ 深鉢形 3

◎ 第 2 群 土 器 （大洞B・C式）

☆粗製 → 深 鉢 形 4 鉢 形 1 壺形 2

◎ 第 3 群 土 器 （大洞C1式）

☆精製 深 鉢 形 5 鉢 形 2 皿形 14

台付鉢形 5 注 口 1

☆粗製 深 鉢 形 19 台付鉢形 1

◎ 第 4 群 土 器 （大洞C2式）

☆精製 壺 形 3 台付鉢形 1

☆粗製 壺 形 5 台付鉢形 3

◎ 第 5 群 土 器 （大洞B・C～C2式）

☆粗製 深 鉢 形 20

〔表３〕を器形別に再掲すると上記のようになる。念のため、〔表３〕をつぎに掲げておくことにする。

福泉遺跡出土土器，群別・型式別・器形別分類表〔表３〕

群別・型式別	深　　鉢	鉢　形	壺　形	皿　形	台付鉢 台付深鉢	注口
第１群土器 （大木８ｂ式）	30・31・32					
第２群土器 （大洞Ｂ・Ｃ式）	3・4・5・6	1	2			
第３群土器 （大洞Ｃ1式）	34・35・36・37・38 7・8・9・10・11・12 13・14・15・26 42・43・44・45・46・47 48・49・50	33・40		39・29 16・17・18 19・20・21 22・23・24 25・27・28	63 94・95 96・97 64	41
第４群土器 （大洞Ｃ2式）	89・90・91・92・93		51・52・53		65 66・67・68	
第５群土器 （粗製土器） （大洞Ｃ1～Ｃ2式土器に伴出する）	69・70・71・72・73・74 75・76・77・78・79・80 81・82・83・84・85・86 87・88	←→	54・55・56 57・58・59 60・61・62			
備　　考	１．数字は、土器番号である。 ２．上段は、精製土器、下段は粗製土器である。 ３．←→は、両者の可能性があるものである。					

このように、器形別に出土土器を見た場合その土器組成は、単純で欠けた器種が目立っているのである。このことについては考察の項で再び述べたい。

つぎに、各群別、型式別土器について述べることにする。{なお、T2－Ⅱ－Ⅰa等とPP・L１～P・L11の下段に表記してあるのは、トレンチ－（T2）－Ⅱ区（北よりⅠ区、Ⅱ区、または、東よりⅠ区、Ⅱ区の意）－Ⅰａ（Ⅰａ層）の略記である。}

すなわち、T2－Ⅱ区－Ⅰaとは、T2のⅡ区のⅠa層より出土したことをあらわすものである。

〔Ⅳ〕 出土土器（群別，型式別土器について。）

（1）第1群土器（大木8b式比定）→（P•L 4 －30・31・32）→縄文時代中期の土器

この第1群土器としたものは、3片の出土である。いずれも深鉢形土器と思われる。

（30・31）は、胴部破片で、大木8b式に類似の沈線文が施文される。また（32）は、口縁部を含む破片で、複合口縁のものである。

この大木系土器といわれる土器群は、東北地方南部（宮城県方面）に文化圏をもっていたものであるが、次第にその文化が北上し、縄文時代中期初頭以降に、本県に従来から栄えていた円筒土器文化と接触して大木系土器文化が生まれたとされているものである。

そして、この大木8b式比定土器は、円筒上層式土器e類（表1参照）にほぼ併行するとされている。すなわち、本県では、円筒土器系の文化と、大木系の土器文化が、中期末に一時期共存していたのである。

（2）第2群土器（大洞B•C）→（P•L 1 －1・2，P•L 2 －3～6）→縄文時代晩期の土器

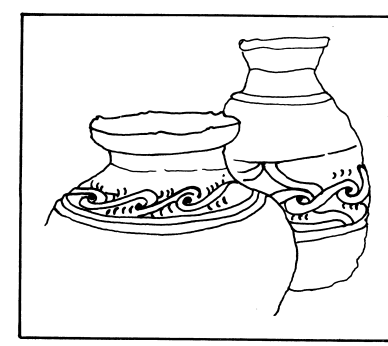
この第2群とした土器は、大洞B•C式土器である。この型式の土器は、〔表2・表3〕に示したように、完形土器（粗製鉢形1．粗製壺形1）および4片の深鉢形土器片である。

この第2群土器としたものはP•L 1－1の鉢形土器に見られるように、その口頸部施文帯に「羊歯状文→しだじょうもん」が施文されるものである。（註1．このP•L 1・2としたものは、T•P1 － Ib層より砂鉄塊と共伴して出土した。

（註2．羊歯状文という名称は、植物の羊歯類の葉に、その文様が似ているので、このように呼ばれている。）

（3・4・5）はこの羊歯状文が口頸部文様帯に、やや変形されて施文されたものである。

また、（2）は、無文の壺形土器であるが、器形から見て、この期のものとした。



（羊歯状文参考例）

（3）第3群土器　（大洞C1式）→（P·L2－7～15，P·L 3－16～29，P·L 5－42～50，P·L 7－63・64）

この第3群土器（大洞C1式）としたものは、大洞C1式の主文様である「刺突文」および「K字文・X字状文・大腿骨文」の施文されるものを一括した。

（註・K字文とは、英字のKに、X字状文とは、同じく英字のXに似た形の施文で、浮彫りにされ、磨消縄文－すりけし縄文－手法を用いている。また、大腿骨文－だいたい骨文－とは、人間の大腿骨に似た文様である。）

そして、これらの第3群土器は、Ⅰ類→粗製土器、Ⅱ類→精製土器に大別される。以下Ⅰ類、Ⅱ類に大別し、さらに器形別に細別して述べることにする。

◎Ⅰ類→粗製土器→（P·L 2－7～15，P·L 5－42～50，P·L 3－26，P·L 7－64）

この第3群土器→Ⅰ類とした粗製土器は、深鉢形土器（P·L 7－7～15，P·L 5－42～50，P·L 3－26）と台付土器（P·L 7－64）の2器形に分けられる。

＊　このうち、深鉢形土器としたものは、口頸部の施文帯に、「刺突文」が横列に一段、または二段に付されるもの（P·L 2－7～15，P·L 3－26）、および、羊歯状文のくずれた斜行する沈線文に、刺突文の付されるもの（P·L 5－42～50）－の2種に分けられる。この2種のうち、前者が新しく、前型式である大洞B·C式の主文様である「羊歯状文」の名残りを止める後者が古い。

＊　また、台付土器とした（P·L 7－64）は、台部のみで、その上部は不明であるが、多分台付深鉢形土器のものと思われる。

◎Ⅱ類→精製土器→（P·L 3－16～25，27～29，P·L 4－33～41，P·L 9－94～97）

この第3群土器→Ⅱ類とした精製土器は、皿形土器（P·L 3－16～29，P·L 4－39），鉢形土器（P·L 4－33，40），深鉢形土器（P·L 4－34～38），注口土器（P·L 4－41），および、台付土器（P·L 7－63，P·L 9－94～97）の5器形に分けられる。

＊　このうち、皿形土器は、さきに述べた（K字、X字、大腿骨文）のいずれかが施文されたもの（P·L 3－16～20，22～29），

口縁部に沈線文が1～2条施文されるほかは無文で研磨されているもの（P·L 3－21，

P・L 4－39）の2種がある。

＊　また、この類とした鉢形土器は、肩部に平行沈線文をめぐらせ、その間に「刺突文」を帯状にめぐらすもの（P・L 4 －33）と，破片ではあるが、「X字状文」と思われる施文のあるもの（P・L 4 －40）に分けられる。

＊　さらに深鉢形土器としたもののうち、（P・L 4 －35～37）は、同一個体のものと思われ、刺突文と磨消縄文手法による「大腿骨文」のくずれた文様がある。（34．38）は、小破片であるが、この期の同類と思われる。

＊　注口土器は、1点の出土で、しかも小破片である。（P・L 4－41），このものは黒色に研磨されたものであって、単位文様は不明であるが一応大洞C1式（第3群）のものとしたが、同B・C式かも知れない。

＊　台付土器は破片で2個体分出土した。このうち、（P・L 7－63）は、台部上端に「刺突文」下端に縄文帯を持つものである。

また、（P・L 9－94～97）は、同一個体のもので台部および胴部下半の破片である。このものは、台付浅鉢形土器と思われる。

（4）第4群土器（大洞C2式）→（P・L 6－51～53，P・L 7－65～68，P・L 9－89～93）

この第4群土器　（大洞C2式）として分類したものは、大洞C2式の主文様である平行沈線文の施文されるものを一括した。

これらの第4群土器を、Ⅰ類→粗製土器、Ⅱ類→精製土器に大別し、さらに器形別に細別して述べることにする。

◎Ⅰ類→粗製土器→（P・L 7－66～68，P・L 9 －89～93）

＊　このⅠ類としたもののうち、（P・L 7－66～68）としたものは、台付鉢形土器の台部である。いずれも粗製土器であるが、（67）には、細沈線文が2条施文されるものである。

＊　また、（P・L 9－89～93）としたものは、深鉢形土器の破片で、口頸部施文帯に3条を基本とする平行沈線文が施文される大洞C2式土器の特徴を見せ、肩部下には、左傾する縄文の施文されるもの（89　93）右傾する縄文の施文されるもの（91・92）、条痕文の施文されるもの（90）に分けられる。なお、（89）は頸部の平行沈線文が2条である。

◎Ⅱ類→精製土器→（P・L 6－51～53，P・L 7－65）

この第4群Ⅱ類としたものは、壺形土器（P・L 6－51～53）と台付土器（P・L 7－65）に分けられる。

＊ このうち、壺形土器としたものは、肩部の破片と思われるもので、やはり大洞C2式土器の主文様である平行沈線文が、3条程見られるものである。また（65）は台付鉢形土器の台部である。

(5) **第5群土器**（大洞B・C式、大洞C1式、大洞C2式）→（P・L 6－54～62，P・L 8－75～85，P・L 9－86～88，P・L 7－69～74）

この第5群土器として分類したものは、粗製土器を一括したものである。そして、この群とした粗製土器には、縄文、条痕文の他に、施文がないので所属型式を決定するきめ手が施文からはつかみにくいものである。

また、元来粗製土器の使用期間は、精製土器より長いとされ、一型式は遅れると言われているところである。

したがって、これらの土器片については、口頸部の形態から器形を推測すること、他遺跡での出土例、および、本遺跡出土の精製土器の型式を参考にして、以下に述べることにする。

＊（P・L 6－54～62）は、壺形土器の破片である。このうち、（54～59）は、口頸部より胴部へかけての破片で、いずれも、口縁部が強く外反する器形のものであるが、肩部があまり張らないもので、多分第3群土器とした大洞C1式土器と思われる。

また、（60～62）は、壺形土器の胴部破片で、第3群土器（大洞C1式）のものであろう。

＊（P・L 7－69～74）としたものは、鉢形、または、深鉢形土器の底部破片である。これらのものは、第3～第4群土器（大洞C1～C2式）のものである。胎土、焼成、器厚等から考えて第2群とした大洞B・C式土器でないことは、確実である。

＊（P・L 8－75～85）は、（80）を除き、すべて口縁直下より左傾する縄文の施文された大形の深鉢形土器である。このもののうち、（75・76）は、中期の土器（77・83）は、大洞B・C式と思われる。そして他のものは、口頸部が、ゆるく内傾するもので、多分第4群土器（大洞C2式）と思われる。また、（80）は無文で折り返えし口縁を見せ、（82）は、2こ一対の山形突起をもつものである。

＊（P・L 9－86～88）は、深鉢形土器の胴部下半の破片である。このものは、いずれも条痕文が縦位に施文されたものである。

この条痕文の施文されるものの上限は、大洞B式（晩期の最も古い土器型式→表1編年表参照）で、その下限は弥生時代の土器まで永続する施文法である。

そしてこの施文法が最も多用される時期は、第4群土器とした大洞C2式土器であるように思われる。したがって、本資料も第4群土器としておきたい。

以上、簡単ではあるが、本遺跡出土の土器について述べてきたが、破片のためあやまりがあれば御叱正下さるようお願いしたいと思う。

〔V〕 布目状圧痕のある楕円形砂鉄塊

（P・L10－98a，98b）

このものは、長径8.3㎝×短径5.4㎝、厚さ4.1㎝、重さ290㌘のもので、T・P1－Ⅰa層より、砂鉄塊を頂点としP・L 1－1・2が他の三角形の頂点の位置に配置された状態で出土したものである。

＊ この楕円形砂鉄塊としたものは、欠落した内面にも布目痕と思われる圧痕が観察されるもので、その圧痕文は、P・L10 －98aの表面に見られる圧痕と同様のものと認められる。

＊ また、表面（98a）に見られるように、規則正しい布目状圧痕文があり、その上に縄目とも思われる溝が観察される。

また、（98b）の裏面を観察すると、写真左端の布目痕のカーブが、左上方に弧を描いている点を考慮すると、布状の織物に包み、右方向に布を絞って固めた可能性があるように思われる。

＊ この内面にも布目状圧痕文が観察されることから、砂鉄を布に包み、絞って固め、さらに、その上に砂鉄をかぶせ、また布状織物で絞る工程を繰り返えして固めたものと観察されるのである。

＊ つぎに、欠落した小片をこまかくし、磁石をのべると、その小片や砂鉄状細粒は、磁石に密着するから鉄分を含むことは明白であって、多分砂鉄であろう。

＊ また、その小片をピンセットではさみ、火をつけると、溶けながら燃え、その黒煙の匂いは、アスファルトの匂いと思われる。

＊ さらに燃え残りを10倍のルーペで観察すると黒く光りアスファルト状となる。

以上のことから、このような砂鉄塊を作るためには、砂鉄のみでは、長い間固っていないものと考えられる。多分アスファルトを溶かし、それに砂鉄を入れて布状のものに包み絞って固めた可能性がある。

以上は、観察の結果であるが、詳細は化学的分析を待たなければならないだろう。

つぎに考えなければならないのは、用途、機能等々の問題なのである。このことについては考察の項でさらに述べることにしたい。

〔Ⅵ〕　出土剥片（P・L11～99～109）

出土した定型的石器は、1点もなく、後日において石鏃1点を表採した。本遺跡の試掘調査において出土したものは、（P・L11)に掲示した剥片のみである。

剥片は、若干の刃部を形成するもの（剥離痕のあるもの）→（P・L11－99、100、102 104）および、石錐状のもの（103）、剥片→（101、105～109）に分けられる。

〔Ⅶ〕・考　　察

(1) 遺跡の立地

本福泉遺跡は、津軽平野東縁の第二段丘面上にある。この遺跡が所在する地点は、きわめて見晴らしのよい地形であって、晩期の遺跡は、ほぼこのような地点に造営されるもののようである。

このように、晩期の縄文人は、彼等の生活する地点を当該地形に選定することは、単に風景のみを条件としたものとは考え難いところである。

われわれは、遺跡の立地条件または、その要素というものを分析していかなければならないと考えられる。

遺跡の立地条件または、その要素を明らかにするためには、同一時期のいくつかの遺跡を地形、遺物の内容、（土器、石器、土製品、石製品、木製品、文化遺物等々）、その他、一つの仮説をたて、それに沿って分析検討していかなければならないであろう。

そのことによって、個々の遺跡の特色が把握され、共通的条件を有する遺跡群として、その性格が明らかになるものと考えられる。

われわれは、個々の遺跡内の研究のみではなく、遺跡の相互比較をすゝめていかなければならない。個々の遺跡の立地条件を明らかにすることは、その基礎研究として捉える必要があろう。わたしたちは遺跡の立地条件とその特色を今後追求していく必要があろう。

(2) 出土土器について

さきに述べたように、今回の発掘において出土した土器群は、第1～第5群土器に分けられるのであるが、この出土土器を土器型式で示すと、縄文時代中期末に位置づけられる大木8b式に比定される土器と、縄文時代晩期の、大洞B・C，同C1，同C2，式の土器、すなわち、晩期前半の土器型式3型式であった。

以下、前者と後者に分けて簡単に考察してみたい。

◎中期末葉の土器

さきに述べたように、このたびの試掘調査において、大木8b式に比定される土器片が3片出土した。（P・L 4－30・31・32）

この土器は、大木系の土器であるとされるものである。この3片の土器片は、大木式土器文化が東北地方の南部より次第に北上し、本県に土着の円筒土器文化と接触して生まれた土器文化であるとされるところである。

したがって、円筒土器の要素と、大木式土器の要素をもつもので、純粋に大木式土器ではないのである。

土器文化の伝播方式を発掘調査の遺物から考察した場合、2種の方式が考えられるのである。その1は、移入方式であるが、これは、当地方で生産されたものとは、考えがたい純粋な大木式土器が、大木系土器に共伴して出土することがある。（深浦町一本松遺跡、1980、新谷）このことは、土器そのものが移入されたものと考えられる例である。

その2は、さきに述べたように、大木式土器文化の影響を受けて、本県に従来より栄えてきた円筒土器が変質して生まれた大木系土器の出土である。

このように、文化の伝播方式には、現物の移入方式と、他文化の影響のもと、主体的に従来の文化内容を変質させ、その結果が土器そのものに反映する方式が考えられるのである。

出土した3片の大木系土器（大木8b式比定）は、後者の所産と思われるものである。

ちなみに、当地方において、大木系土器の出土する遺跡は、つぎのとおりである。

1）妻の神　（金木町）　2）原子B　（五所川原）
3）一本松　（深浦町）　4）石神　（森田村）－の各遺跡

◎晩期の土器

本福泉遺跡の試掘において出土した晩期の土器は、さきにふれた、大洞B・C、C1、C2式の晩期前半の土器群である。

これらの土器群は、別名「亀ケ岡式土器」と呼ばれる土器群である。

本遺跡は、この晩期前半に造営された遺跡である。本県においては、これらの晩期の遺跡は、晩期前半に属するものと、後半に属するもの、および、大洞C2式土器を主とする単独遺跡に分けられる遺跡が多いのである。

本遺跡は、その出土土器の型式から前半に属する遺跡と思われる。

いずれの遺跡においても、最も多量に出土する土器型式から、その遺跡の中心時期が推定できるのである。

本遺跡の試掘において出土した土器群のうち、最も多量に出土したのは、大洞C1式土器である。しかし、本遺跡の造営された中心時期を、この大洞C1式土器を使用した時期と断定することはできないのである。

それは、本格的発掘に備えて、遺跡の中心部をさけて、側辺部にグリットやトレンチを設定したからである。また表採資料を検討すると、大洞B・C式土器片が多い　そのため、試掘調査の結果では、大洞C1式土器が多いという程度で止めたいと思う。

＊　つぎに出土土器の施文等について若干検討を加えてみたい。

出土した大洞B・C式土器は、その施文が、これもさきにふれたように「羊歯状文」とその変形したもののみであって、きわめて単純である。（註・出土数も少なく、かつ、この期の主文様は、数種ある。）

＊　つぎに、第3群とした最も出土数の多い大洞C1式土器群を検討すると、この群においても、「刺突文」を主体とするもののみで、その施文は、単純であると言えるのである。

＊　第4群とした大洞C2式土器においても、この型式の主文様である「平行沈線文」のみで他の主文様のものはない。

＊　第5群とした大洞B・C～同C2式土器に共伴する粗製土器群においては、それぞれの型式的特徴をもっているが出土数が少ないので、その傾向はつかみにくい。

＊　また、土器組成（器形の異なる土器が、同一型式の中で、どのようなセットになっているか）の上でも欠けている器種が多い。

以上のことから、本遺跡の試掘において出土した土器群からは、遺跡の全体像をつかむことには不充分であったと結論せざるを得ないのである。

但し、つぎの2点については、断定できるように思う。

1つは、本福泉遺跡は、縄文時代晩期前半に属する遺跡である。いま一つは、出土した土器は、最も一般的な大洞B・C～同C2式土器を出土する遺跡であって、土器については、地域性が認められないという点である。

(3)　布目状圧痕文のある楕円形砂鉄塊について

このものの観察結果等については、既述したとおりであるが、このものの持つ機能、および用途、さらにその製作工程等に関する問題は、きわめて重要な意味を持つものと考えられる。現段階では、不明な点のみであるが、問題の所在を明らかにし、今後の研究の手がかりにしたいと思う。

〔問　題　点〕

① 縄文時代晩期大洞B・C式土器を使用した時期に、布または編物等の存在の問題

② 砂鉄を一定の形にかためる技術と、その製作工程の問題

③ 用途と、そのものの機能の問題等々が考えられるところである。

筆者の知る限りにおいて、ほぼ同様のものが、「泉山遺跡」→（1973、市川他）によて報告されており、本遺跡出土の資料とあわせて、2例が青森県内で出土しているのである。

また、布目痕等のない砂鉄塊は、筆者が担当した「五月女萢遺跡」→（1980、新谷）においても1例出土しており、縄文時代晩期においては、当時の人々の意識の中に砂鉄の利用という思考があったものと考えられる。いま少し資料の蓄積を待って研究を深めたいと思うところである。また、P・L1－1の鉢形土器とP・L1－2の無文壺形土器が、この砂鉄塊と三角形の3頂点の位置に配置された状態の出土状況は、今後の類例を待ってさらに考えていかなければならない。なお「泉山遺跡」のものは、小ピット状の落込み内より出土しており、このものも特殊な意味を有する可能性がある。

(4) 剥片について

定形的石器の出土は、試掘調査では出土がなく、表採資料の中に有柄石鏃が1点ある。

出土剥片は、若干の細部加工のあるものも存在するが、石器の出土は皆無であった。

このことからも、試掘調査の結果からは、本遺跡の全容をとらえることができないのが残念である。

〔Ⅷ〕 おわりに

福泉遺跡の試掘調査を担当して、わずか2日間の発掘ではあったが、本遺跡が縄文時代晩期前半の遺跡であることが判明した。

当五所川原市内には、観音林遺跡もあり、縄文時代晩期において、当市内の東方台地上に人々の生活があったことが明らかになったのである。

この報告書が、五所川原市の歴史の解明に、いささかなりとも役立てば、筆者の望外の喜びである。

（1983．3 新　谷）

〔参　考　文　献〕

1）1973，市川金丸他「泉山遺跡」」青森県教育委員会

2）1975，新谷雄蔵「観音林遺跡」五所川原市教育委員会

3）1982，新谷雄蔵・川村真一「五月女萢遺跡」市浦村教育委員会

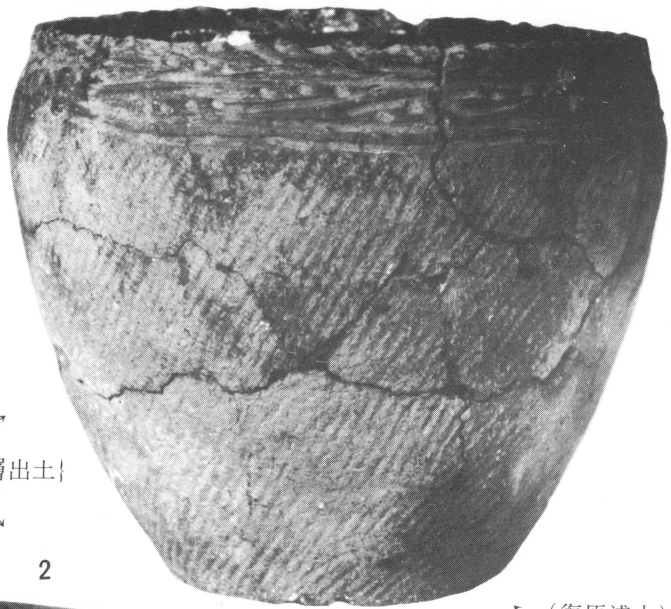
4）1959，芹沢長介「石器時代の日本」築地書館

〔鉢形．壺形土器〕

P・L1

第2群土器（1・2）

1



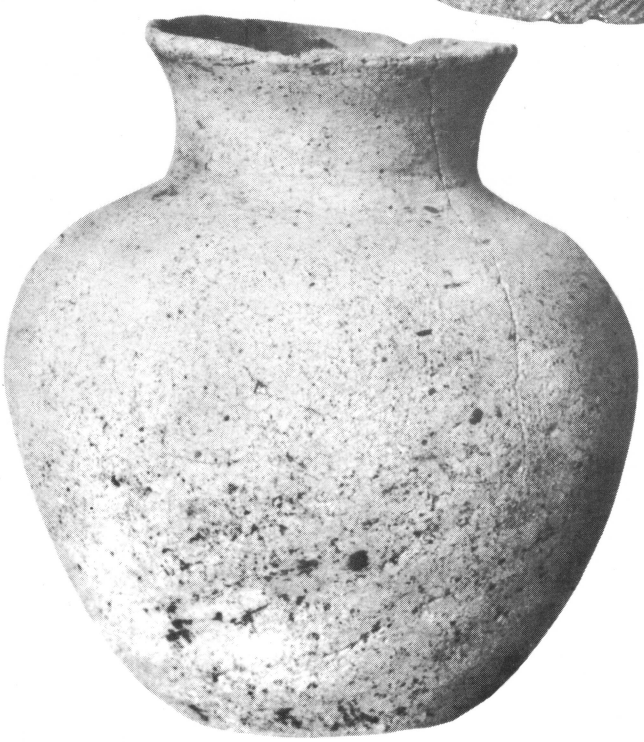
↗

{T・P1北壁下のⅠa層出土}

↘

↖（復原浅木）

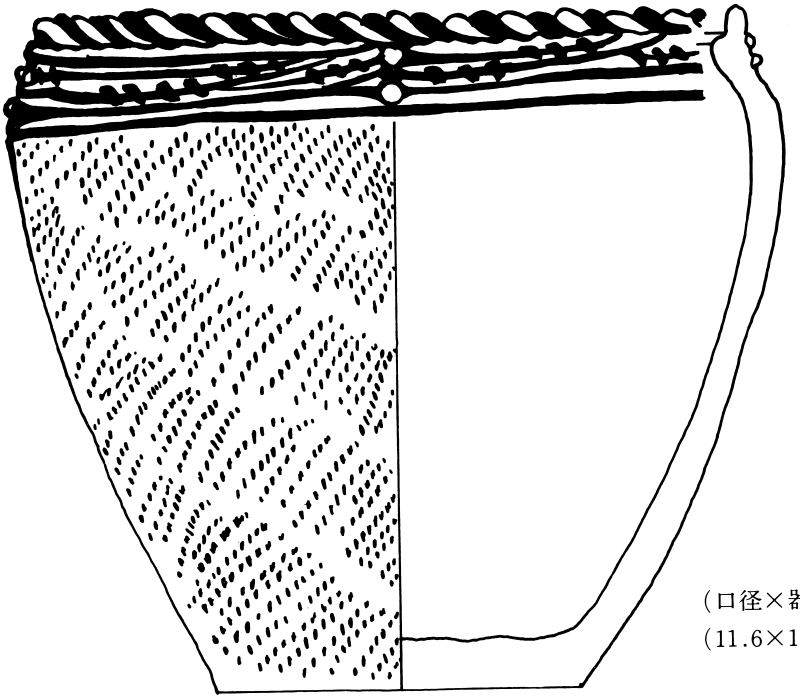
2



〔実測図１〕

1

（P・L１－１）

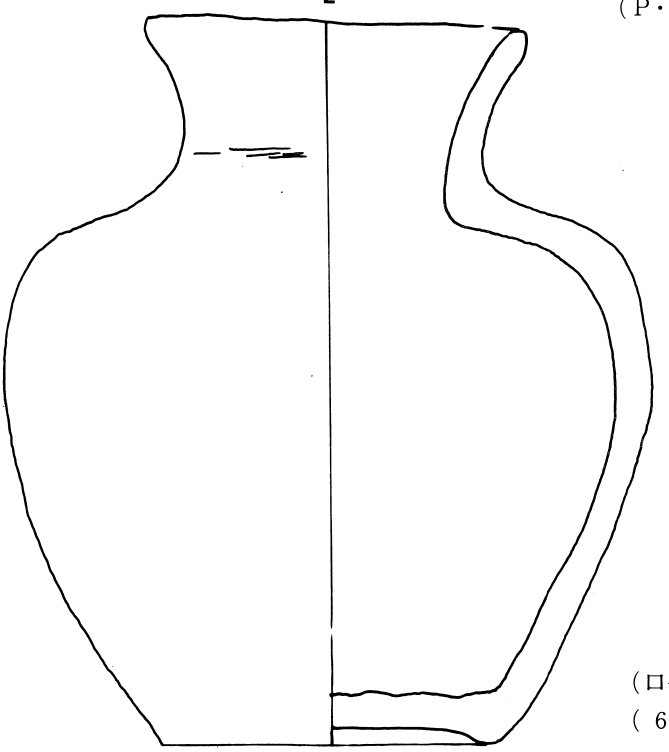


（口径×器高×底径）
（11.6×11.1× 6.2）

〔実測図２〕

2

（P・L１－２）

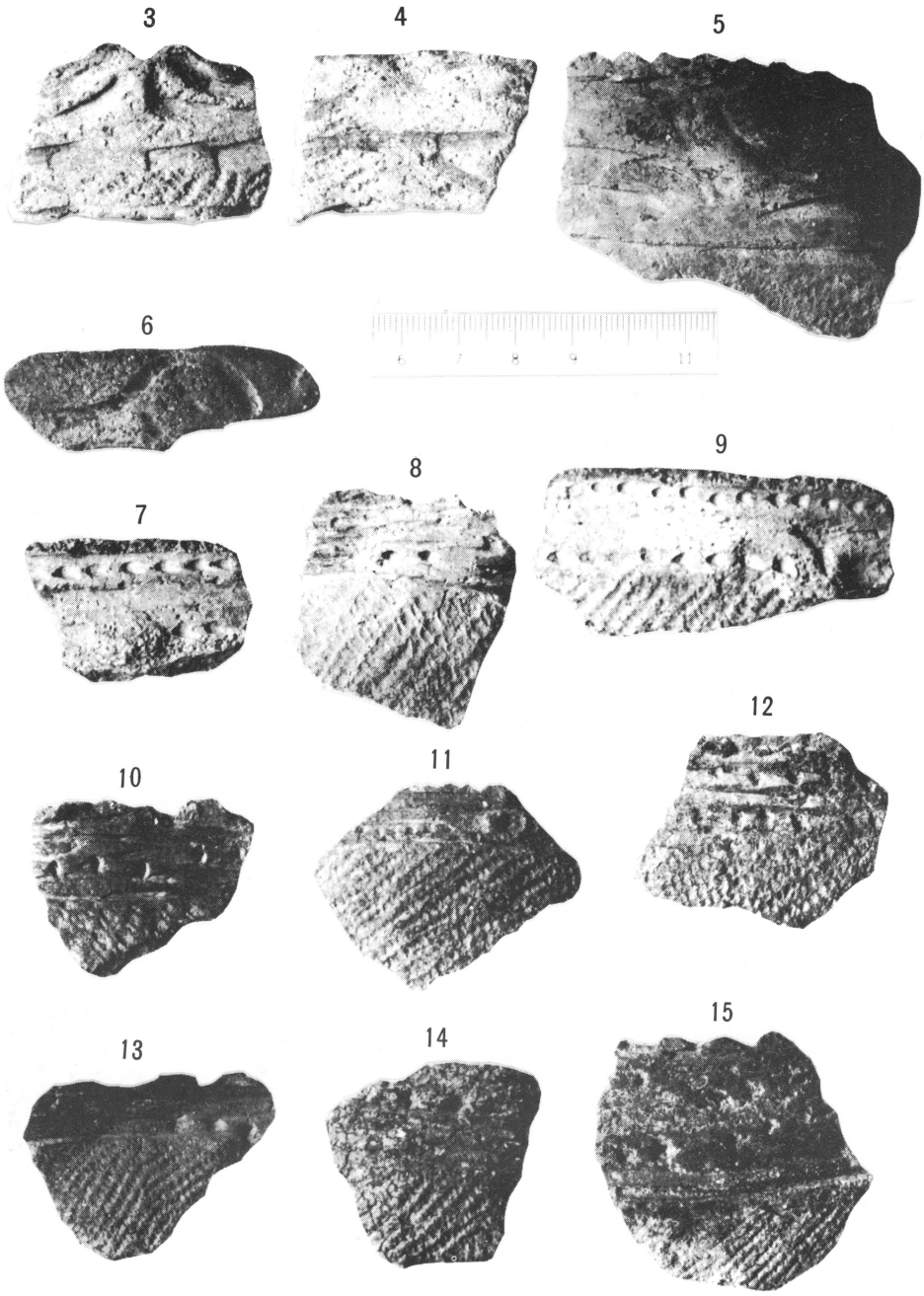


（口径×器高×底径）
（ 6.4×11.7× 5.6）

〔深鉢形土器〕

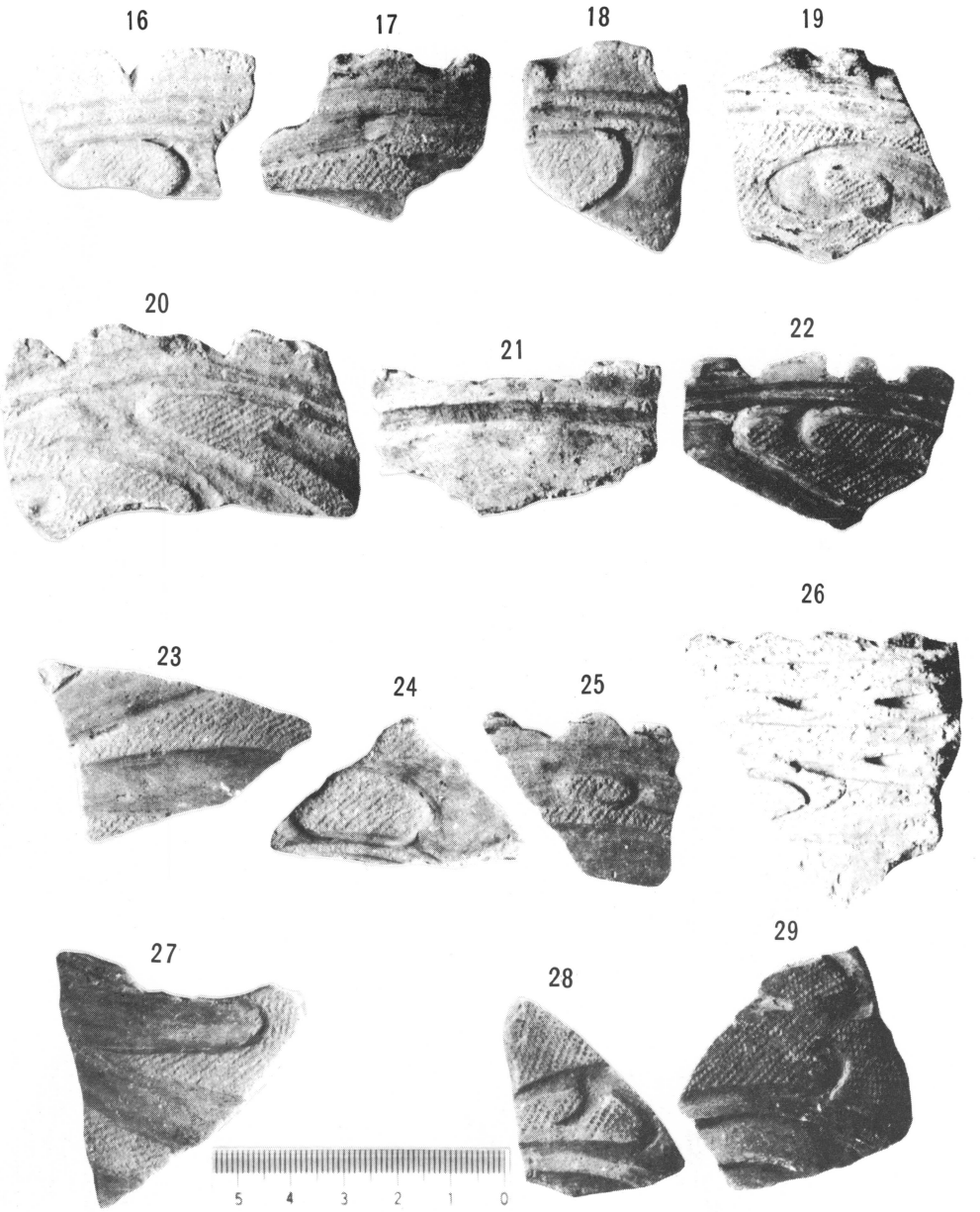
P・L 2

{ 第２群 土器（３～６）
第３群土器（７～15） }



{ （8・10・11・13）＝Ｔ２－Ⅰ・Ⅰａ、（3・4・7）＝Ｔ２－Ⅱ－Ⅰａ
（5・6・9・12・14・15＝Ｔ３－Ⅱ－Ⅰａ }

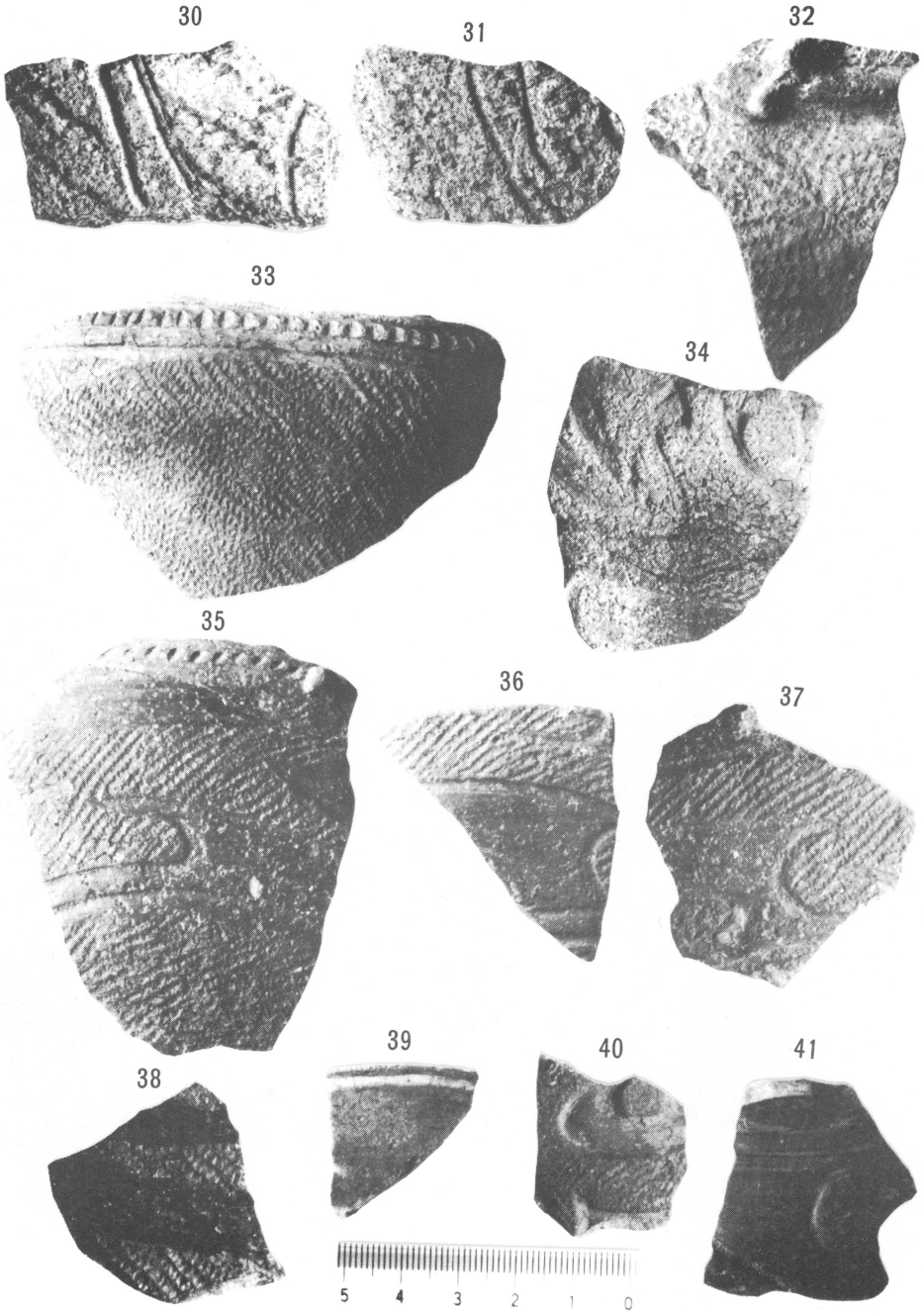
第 3 群土器（16～29）



（20・21）＝T 2－Ⅰ－Ⅰa、（26）＝T 2－Ⅰ－Ⅰa
（28）＝T 3－Ⅰ－Ⅰa、（22・29）＝T 3－Ⅱ－Ⅰa
（16～19・23～25・27）＝T 3－Ⅱ－Ⅰa

〔深鉢形．鉢形．注口土器〕

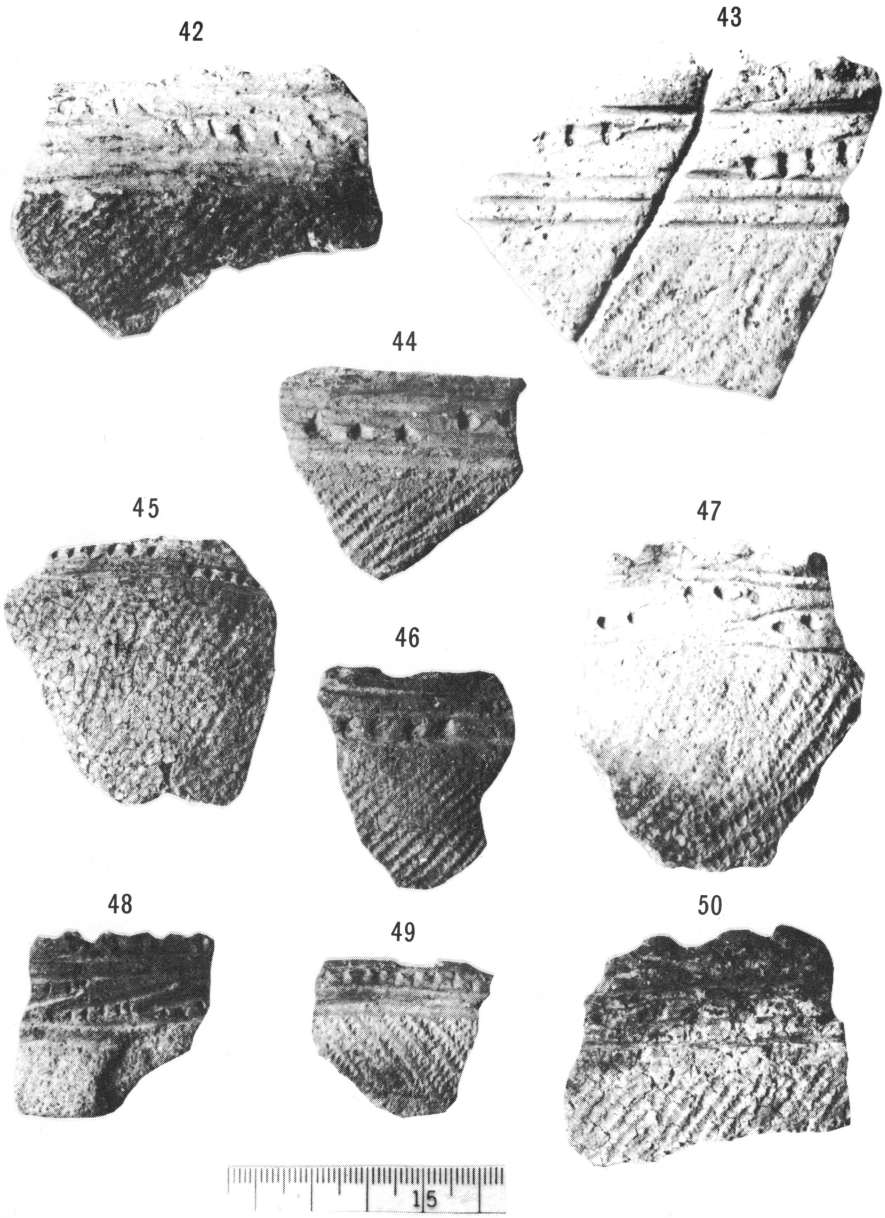
{ 第１群土器（30～32）
第３群土器（33～41） }



{ （30～32）＝Ｔ３－Ⅱ－Ⅰａ
（33・35・36・37）＝Ｔ３－Ⅱ－Ⅰａ }

{ （41）＝Ｔ２－Ⅱ－Ⅰａ
（34）＝Ｔ２－Ⅰ－Ⅰａ
（38・39・40）＝Ｔ３－Ⅱ－Ⅰａ }

第3群土器（42～50）

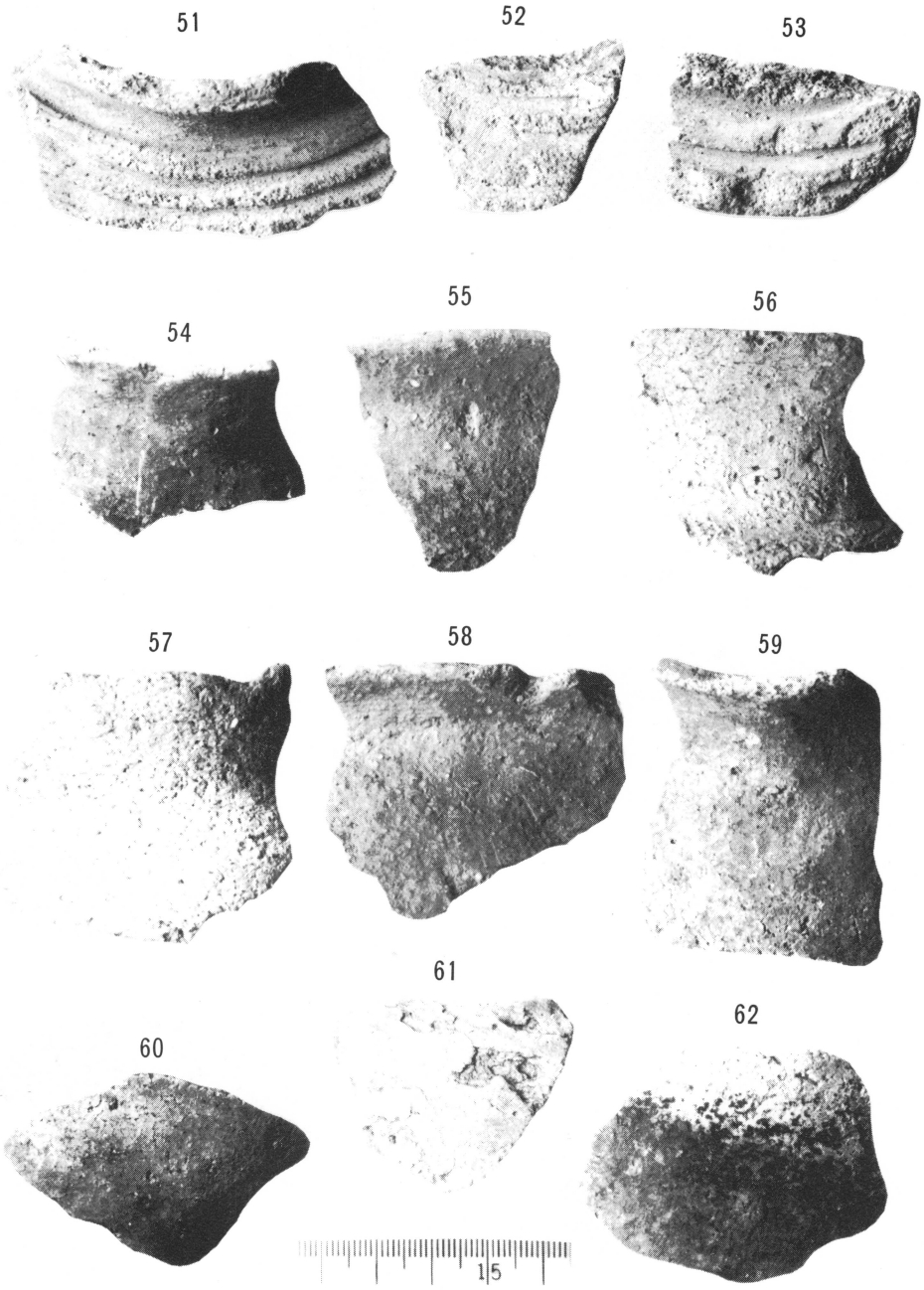


（43・45～49）＝T3－II・Ia
（50）＝T3－II－Ia
（44）＝T2－I－Ia
（42）＝T2－I－Ia

〔壺形土器〕

{ 第４群土器（51～53）
第５群土器（54～62） }

P・L 6



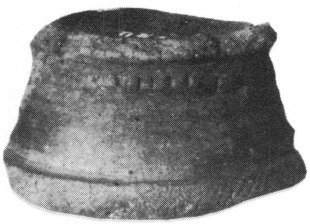
{ （51～54・56・57・61・62）＝T３－II－Ｉａ
（55・60）＝T２－Ｉ－Ｉａ
（58）＝T２－Ｉ－Ｉａ
（59＝T２－II－Ｉａ }

〔台付土器台部．底部〕

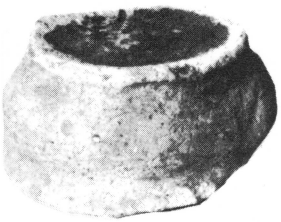
第３群土器（63～64）
第４群土器（65～68）
第５群土器（69～74）

P・L７

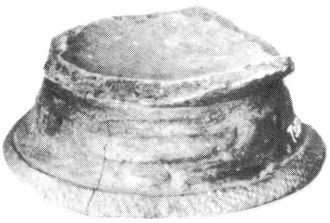
63



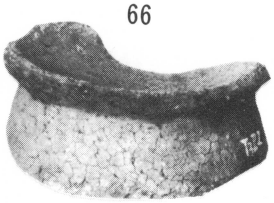
64



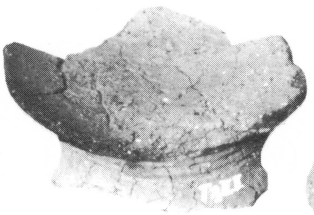
65



66



67

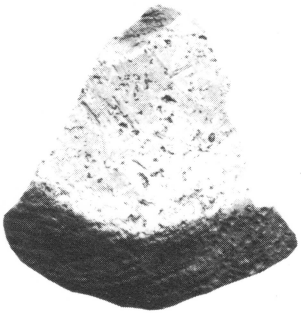


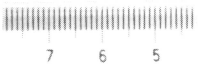
68

69

70

71

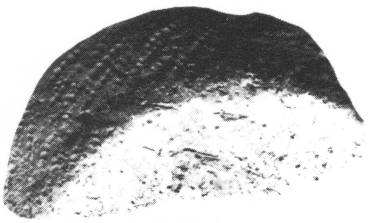




72

73

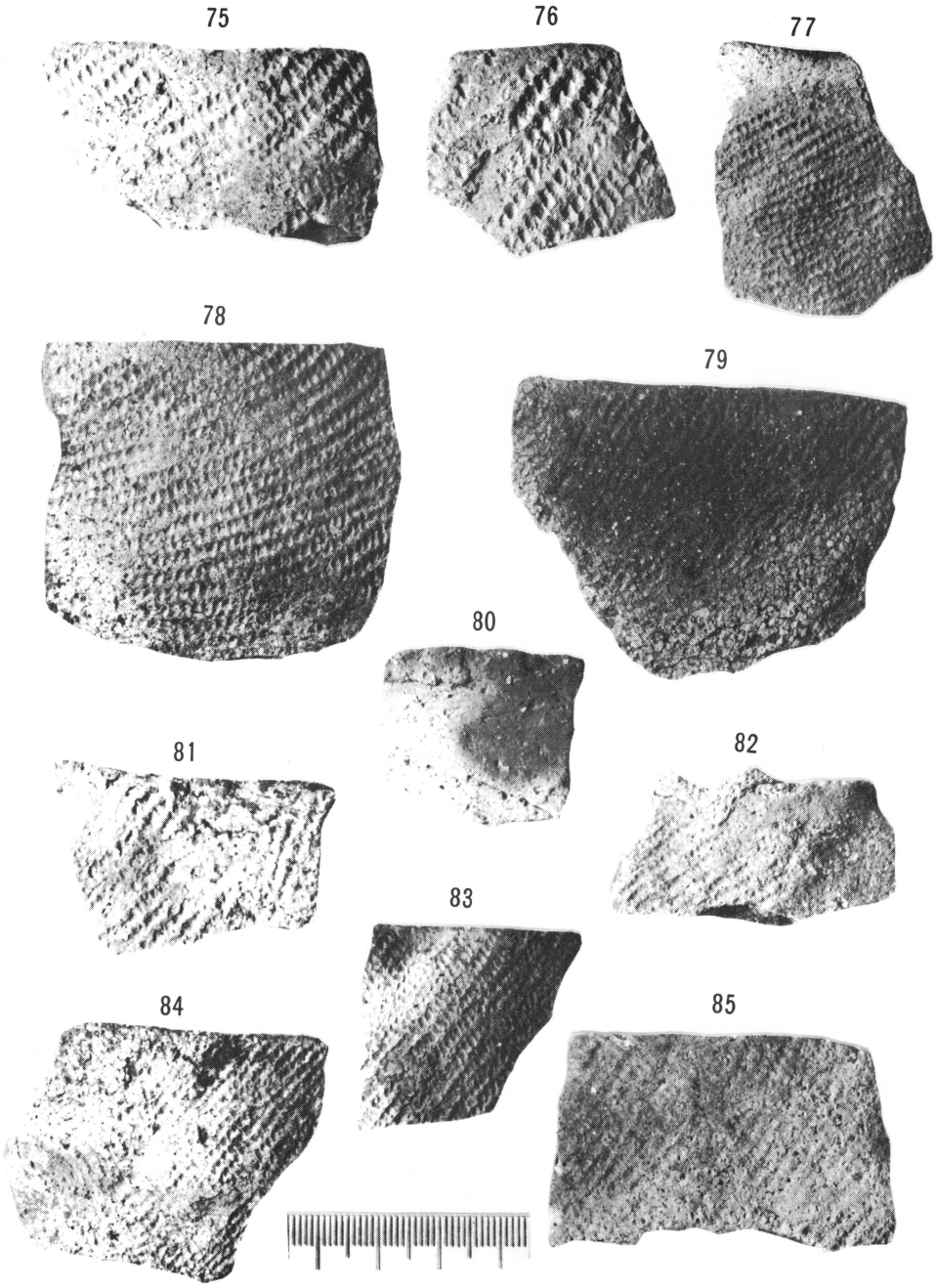
74



（63）＝Ｔ２－Ⅱ－Ⅰａ
（64～66）Ｔ３－Ⅱ－Ⅰａ
（67・68）＝Ｔ３－Ⅱ－Ⅰａ

（69～71・73・74）＝Ｔ３－Ⅱ－Ⅰａ
（72）＝Ｔ３－Ⅱ－Ⅰａ

第５群土器（75～85）



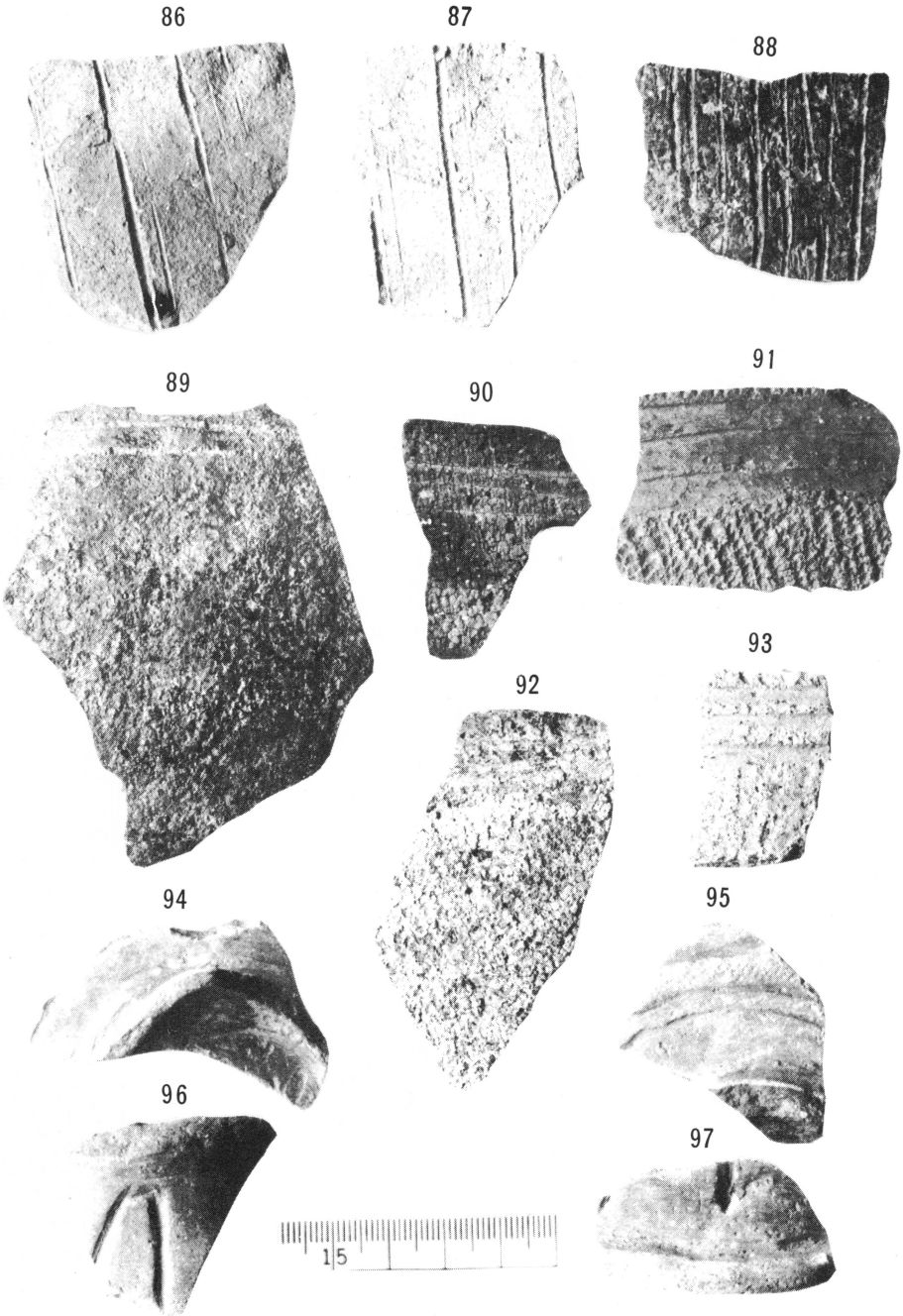
（75・76・83）＝Ｔ３－Ⅱ－Ｉａ
（85）　Ｔ３－Ｉ－Ｉａ
（77）　Ｔ３－Ⅱ－Ｉａ

（78・79・82・84）＝Ｔ２－Ｉ－Ｉａ
（80・81）　＝Ｔ２－Ｉ－Ｉａ

〔深鉢形．台付土器〕

第３群土器（94～97）
第４群土器（89～93）
第５群土器（86～88）

P・L 9



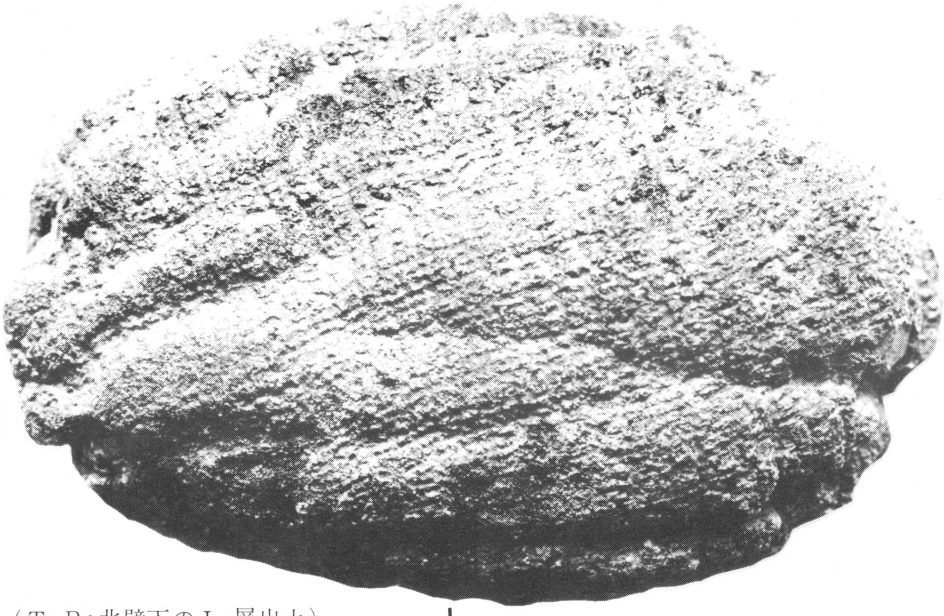
（91・92・93）＝T 2－II－I a
（86～88）＝T 3－II－I a

（94～97）＝T 3－II－I a
（89・90）＝T 3－II－I a

〔布目状圧痕のある隋円形砂鉄塊〕

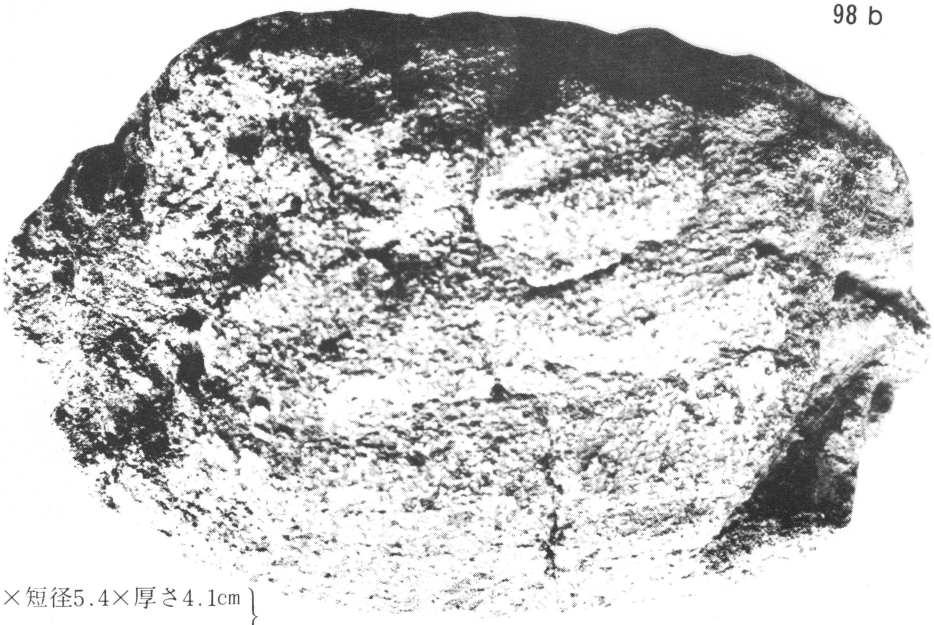
→（1×$\frac{2}{3}$倍）

98 a

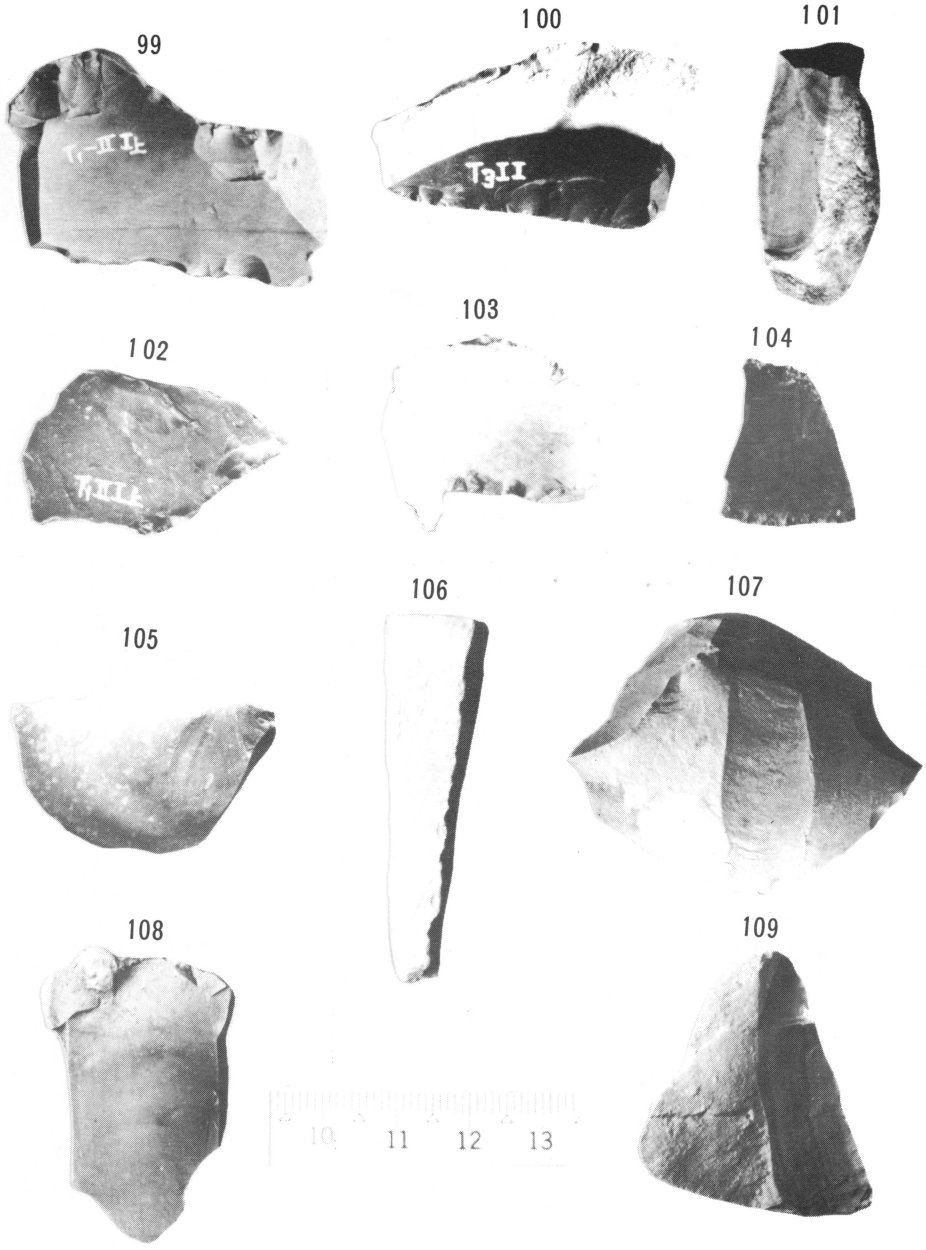


（T・P1北壁下のⅠa層出土）

98 b



長径8.3×短径5.4×厚さ4.1cm
重さ 290g



{ (101・103・106～108) ＝T2・I・Ia
(104・105・109＝T3・II・Ia }

1983.3.30
福泉遺跡
・発行所　五所川原市教育委員会
・著　者　新谷雄蔵
川村真一
・印刷所　（有）小野一印刷